

まちを歩く

北国街道・地蔵坂

宿場町木之本のメインストリートは、北国街道と地蔵坂。北の街らしいどっしりとした造りの家並みが続く。店構えに惹かれ、香りに誘われ、一軒一軒のぞいてみたくなる…。



「北国街道と脇往還」画・福山聖子（1993年）

2つの街道の会合ところ。「昔の名残がなくなって、変わってしまった」と地元の人と言うが、福山さんには、そんなおぼあさんも木之本らしくて嬉しい。街道の面影がたくさん見つかったようだ。



▲「かどや」の望月総さん

飛

木之本地蔵
浄信寺



北国街道

かどや
82-2031

▼「はとや」の小森幸雄さん



はとや
82-3387

地蔵坂

居川製菓舗
82-2172



▲「居川製菓舗」の居川昌彦さん

JR北陸本線

きのもと

木之本銘菓 なつかしの味 でっちゃん羊羹

はとや／木之本町木之本 一三二七 TEL 〇七四九 八二二 三三八七
居川製菓舗／木之本町木之本 一〇八七 TEL 〇七四九 八二二 二七二七
URL <http://homepage1.nifty.com/isawaseekahor>
かどや／木之本町木之本 一〇七二 TEL 〇七四九 八二二 〇三一一

竹の皮に包まれたでっちゃん羊かんは、ふるさとの味、お袋の味がするなつかしいお菓子。湖北人なら一度は口にしたことがあるだろう。今も木之本町の地蔵坂に面した三軒のお店で製造販売されている。うれしいことに、年々販売数が伸びているという。長浜あたりからも、法事の御供物にとたくさん買っていく人もあるそうだ。若い人にも喜ばれるでっちゃん羊かんを作る老舗ののれんをくぐってみた。

「丁稚」という言葉は、近ごろはあまり聞かれなくなった。職人や商人の家に住み込んで、技術や商売のしかたを習う少年を言った。その家の雑役もしながら一人前になっていく年季奉公の少年たちだった。

近江商人の本場、近江八幡市や日野町、五个荘町あたりには、丁稚少年が多かった。その少年たちが、盆や正月のほか、特別に休みをもらって親元帰りをするとき、里への土産として持ち帰ったのが竹の皮に包んだ羊かん、それがいつしか「でっちゃん羊かん」と呼ばれるようになったという。

木之本町は商人の町というより、北国街道の宿場町、木之本本地蔵・浄信寺の門前町だった。北国街道と北国脇往還の分岐点だった木之本宿は、元禄十一年（一六九八）の記録によれば、本陣、脇本陣、問屋、馬持、旅籠（旅宿）十数戸の商舗と多くの人家が街道の

富田酒造

納得でできるいい酒を 少量吟味



大正時代、美食家魯山人が逗留し、その手になる「七本鎗」の扁額を残した。店の間に掲げられているのがそれだ。

「七本鎗」とは、賤ヶ岳の合戦（一五八三）で勇名を馳せた七人の武将を指している。
天文年間（一五三二～一五五五）に創業した富田酒造の十五代目、富田泰伸さん（二十八歳）は、家業を継ぐため、昨年、東京からUターン

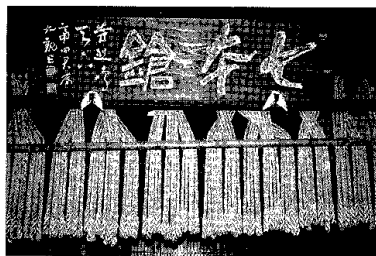


▲「七本鎗」を手にする富田泰伸さん

して来た。四百五十年という歴史の重みに、とくに気負いを感じている風でもない。「時間をかけて繋がってきたものですから引き継いでいかなければいけません、それをプレッシャーに感じて動きが取りづらくなるだけなので、あまり考えてません。若さのゆえかもしれないけれど...」。

「好きです。最近、料理との相性が気になりますね。けど、弱い。何べんも痛い目にあってます」。

木之本町木之本 一〇七二
TEL 〇七四九 八二二 一〇三三
e-mail sake.7@basil.ocn.ne.jp



▲北大路魯山人（大観）の手になる扁額

外で飲むときは、周りの人が飲んでいる銘柄、どういう意識でそれを選んだのか、店の品揃えや提供の仕方はどうか、さらに酒の管理具合は何かがなものと、気になることも多いようだ。

これから先、どのように店を展開していくかは、まだ模索中のようなのだが、「酒造りを大きくするつもりはありません。これだけは言い切れます。納得のいいものを、少量吟味してつくっていききたい。地酒の色も濃く残したいですね」

風格のある店構えは道行く人の目を留める。「木之本に來られた方が必ず寄ってください。ような店にしたい。陶芸にも興味があるので、それをからめた店づくりも考えたいと思っています」。

まちの歴史の深さからも学ぶことは多い。そんな地元情報も提供できるお店をめざしたいという。（らん）